

# 『三玉挑事抄』注釈 雑部（五）

岩 坪 健

本稿は『三玉挑事抄』の巻末、雑部708～750番（巻軸歌）と跋文を掲載する。凡例は雑部（二）と同じであるので省略する。担当者はすべて本学博士課程在学者で、以下の通りである。なお各項目末尾の（ ）内に、担当者の氏名を示した。

森あかね、嶋中佳輝、橋谷真広、八木智生、丹羽雄一、溝口利奈、湯本美紀

亀井の水を掬て

708 以下四頁、記号略 まれに來てむすふかめゐのみつからやうき木にあへるたくひなるらん

阿含経曰、仏告<sup>三玉ヲ</sup>諸比丘<sup>ニ</sup>。「如<sup>シ</sup>大海ノ中有<sup>ニ</sup>一ノ盲亀<sup>ニ</sup>、寿無量劫<sup>ニ</sup>。百年<sup>ニ</sup>一<sup>タビ</sup>過<sup>テ</sup>出<sup>レ</sup>テ、頭ヲ浮<sup>ニ</sup>、有<sup>ニ</sup>一木<sup>ニ</sup>、正有<sup>ニ</sup>一<sup>ノ</sup>孔<sup>一</sup>、漂<sup>レ</sup>流<sup>レ</sup>海<sup>ノ</sup>浪<sup>ニ</sup>、随<sup>レ</sup>流<sup>レ</sup>東<sup>ノ</sup>西<sup>ス</sup>。盲亀<sup>ノ</sup>百年<sup>ニ</sup>一<sup>タビ</sup>出<sup>テ</sup>、得<sup>レ</sup>遇<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>孔<sup>ニ</sup>」云云。

〔出典〕雪玉集、六四三四番。涅槃玄義發源機要、卷第四。

〔異同〕『新編国歌大観』「亀井の水を掬て―諸堂巡礼、宝蔵にて靈宝どもことごとく拝見、宿縁浅からず有りがたく

覚え侍り、聖靈院にて御影どもをがみ奉りて奥のかた見めぐりオママらし侍れば、浄土曼陀羅くち損じてかたばかりなり、これなむ西山上人、不断念仏勤行ありし所なるべきと往事を感じて涙をながし侍りぬ、亀井の水を掬びて。『涅槃女義発源機要』「仏告諸比丘―告諸比丘」「百年一過出頭―百年一遇出頭」「浮有一木正有一孔―復有浮木止有一孔」「随流―随風」。

〔訳〕 亀井の水を掬すくつて 以下の四首は紀行中に詠んだもの  
たまに来て亀井の水を両手で掬う私（実隆）は、盲目の亀が（百年に一度、海上に顔を出したとき）浮き木に（空いている穴に）出会ったようなものだろうか。

阿含経によると、仏が多くの僧侶にお告げになることには、「大海の中に一匹の盲目の亀で、無量劫の時間（無限の長い時間）を生きるものがいた。その亀が百年に一度、海上に顔を出して浮かぶと、一つの木があり、それには一つの穴が開いていて、波に漂流して流れのままにあちこち移動していた。（仏の教えに会うことが難しいのは）その盲目の亀が百年に一度、海上に顔を出したときに、この穴に出会えるようなものである」云々。

〔考察〕 歌肩に「以下四首紀行中」と注す通り、以下の四首は三条西実隆が七〇歳になった大永四年（一五二四）の四月下旬から五月初旬にかけて、住吉、天王寺、高野山に参詣した際の詠作で、当歌は四天王寺での詠歌。『雪玉集』に付けられた詞書によると、実隆は四天王寺聖靈院で、法然の弟子で浄土宗西山派の開祖となった西山上人（証空）が勤行に励んだ所を見て、感涙を流した。出典の「盲亀の浮木」は、めったにない幸運にめぐり合うことのととえで、ここでは実隆が四天王寺に参拝したことを指す。当歌は「かめろのみつから」に「亀」と「かめろの

みづ」(亀井の水)、「みづから」(自ら)を重ねる。

〔参考〕出典の話は『雑阿含経』卷一五にあるが、本文異同が多いので、異同の少ない『涅槃玄義発源機要』(中国北宋代の僧、智円が記した『涅槃経』の注釈書)を取り上げた。  
(溝口利奈)

夢殿より持来の法花経など拝見し奉る

709 むは玉の夢殿よりや見ぬ世をもこゝに伝へし法のことの葉

聖徳太子伝曰、太子在斑鳩宮。入夢殿内。設御牀褥、一月三度、沐浴而入。明旦談海表ノ雜事。及製諸経疏也。若有滞義、即入夢殿、常自東方金人到告以妙義也。閉戸不を開七日七夜。不進御膳。不召侍従。妃已下不得近之。時人、大異之。惠慈法師曰、「殿下入玉へり三昧定。敢莫驚。」八箇日之晨、玉机之上有卷経。設筵引惠慈法師告曰、「是吾先身修修行。衡山、所持之経也。去年、妹子将来者吾弟子、経也。三老比丘不識吾所藏之处、取他経送。故吾頃、遣魂取来レリ。指所落字而示法師。師大驚、奇レテス之ヲ。」

〔出典〕雪玉集、六四三三番。聖徳太子伝曆、卷下。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『聖徳太子伝曆』「取他経送—取佗経送」。

〔訳〕夢殿から齋された法花経などを拝見し申し上げる

夢殿から(もたらされたの)だなあ。見たことのない過去世をも現世に伝えた仏の言葉は。

聖徳太子伝曆によると、太子は斑鳩宮にいらつしやり、夢殿の中にお入りになる。寝台に敷物を用意し、ひと月に三度、沐浴をして(夢殿に)お入りになる。明るる朝、海外のいろいろなお話になる。また、諸

経の注釈書をお作りになる。もし注釈に行き詰まることがあれば、すぐ夢殿にお入りになると、いつも東方から仏が(夢の中に)来臨して優れた解釈を授ける。戸を閉じたまま参籠なさること七日七夜の間、(太子はお食事をされない。侍従をお呼びにならない。妃をはじめ誰も近づくことができない。人々はたいそう不思議に思った。惠慈法師が言うには、「殿下(太子)は精神を集中して、深い瞑想に入っておられる。まったく驚くことはない」。八日目の朝、(太子の)美しい机の上に一卷の経があった。(太子が)筵を敷き、惠慈法師を引き入れておっしゃるには、「これは私が前世において、衡山で修行した時に持っていた経である。去年、小野妹子がもたらした経は私の弟子のものである。三人の老僧は私が(経を)納めた場所を知らず、他の経を取って(妹子に)持たせたのである。そのため私は先ごろ(衡山に)魂を飛ばして(経を)取って来たのである」。(太子は妹子が持ってきた経の)脱字を指して惠慈法師にお示しになる。惠慈法師は大変驚き、不思議に思った。

〔考察〕「金人」は金色の人の意で、仏や仏像をいう。「惠慈」は高句麗から渡来した僧で、聖徳太子の仏法の師。「慧慈」とも書く。「三昧」と「定」は、心を集中して安らかに静かな状態を指す。「比丘」は出家して具足戒を受けた男子のこと。当歌は『聖徳太子伝暦』に記された夢殿と経に纏わる伝説に思いを馳せて詠む。第一句の「むは玉の」は「夢」に掛かる枕詞。

〔参考〕『雪玉集』の詞書には、大永四年(一五二四)四月一九日に伏見へ向かい、小坂に着いて一泊するまでの船旅と、翌二〇日に光明院からの迎えて聖徳太子の創建と伝える四天王寺を参詣する様子が記されている。「夢殿より持来の法花経など拝見し奉る」はその一部分。実隆の『高野参詣日記』(『群書類従』所収)にも、『雪玉集』の詞

書と同様の記述が見られる。

(丹羽雄一)

内よりたまはりし御爪のきれを納め奉るつゝ、み紙に書付し

710 爪のうへの土よりまれの身をうけて仏の道は手にとりつへし

涅槃經三十一曰、生三人趣者、如爪上土、墮三途者、如十方土。

〔出典〕雪玉集、六四五三番。往生要集、卷上、大文第一、厭離穢土。

〔異同〕『新編国歌大観』「たまはりし給はりたりし」「つゝ、み紙に裏紙に」。『往生要集』「涅槃經三十一曰大經云」。

〔訳〕 主上（後柏原天皇）から頂戴した御爪の切れ端を納め申し上げる包み紙に書き付けた

爪の上の（わずかな）土よりも希少な生を享けたのだから、きつと仏の（説かれた）道を（主上は）手にするに違いない。

涅槃經の卷三十一によると、人間世界に生まれる者は爪の上に載せた土のように少なく、三悪道に生まれる者は世界中の土のように多い。

〔考察〕「人趣」は六道（地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天上）のうちの人間界。「爪上の土」は爪つまんだ僅少の土の意。「三途」は地獄道、餓鬼道、畜生道の三悪道。「十方の土」は無量無辺に存在する土の意で、数の多いことをいう。当歌は後柏原天皇の爪を高野山に奉納するにあたり、天皇の成仏が間違いないことを詠む。『実隆公記』大永四年四月一六日の条には「自禁裏御扇被下之、御爪可納高野之由同仰也」とあり、実隆は後柏原天皇の爪を高野山に納めるようにと命じられた。『高野詣真名記』（『実隆公記』所収）同年四月二四日の条には「主上御爪

別而申事由奉納」とあり、奥院に納めた。爪の奉納は、高野山への分骨埋葬の信仰による。

〔参考〕『大般涅槃經』の訳本は北本(『大正新脩大藏經』第一二卷、No.374)と南本(『大正新脩大藏經』第一二卷、No.375)があり、「如爪上土」「如十方」の記述がある『大般涅槃經』卷第三一は南本にあたるが、本文は一致しない。『往生要集』の記述は『大般涅槃經』の取意とされ、「大經」は『大般涅槃經』を指す。(丹羽雄一)

年頃おちたる歯とも取をかせたる、おさむとて

711いかはかり法をそしりしむくひとかおちつくしける恥しの身や

譬喩品曰、其有<sup>レ</sup>誹<sup>ニ</sup>謗<sup>スルコト</sup>。如<sup>レ</sup>斯<sup>ニ</sup>經<sup>典</sup>。見有<sup>レ</sup>誦<sup>テ</sup>誦<sup>テ</sup>書<sup>テ</sup>持<sup>テ</sup>經<sup>者</sup>、輕<sup>ニ</sup>賤<sup>ニ</sup>憎<sup>ニ</sup>嫉<sup>ニ</sup>而<sup>レ</sup>懷<sup>ニ</sup>結<sup>ニ</sup>恨<sup>ニ</sup>。此人罪報汝今復聽。其人命終入<sup>ニ</sup>阿鼻獄<sup>一</sup>、具<sup>ニ</sup>足<sup>シテ</sup>一劫<sup>ヲ</sup>、々<sup>々</sup>更<sup>ニ</sup>生<sup>レ</sup>。如<sup>レ</sup>此展<sup>シテ</sup>轉<sup>シテ</sup>至<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>數<sup>ニ</sup>劫<sup>一</sup>。從<sup>ニ</sup>地獄<sup>一</sup>出<sup>当</sup>墮<sup>ニ</sup>畜生<sup>ニ</sup>云云。中略生<sup>ナカ</sup>カ

〔出典〕雪玉集、六四五五番。妙法蓮華經、卷第二、譬喩品、第三。

〔異同〕『新編国歌大観』「年頃おちたる歯とも取をかせたるおさむとてーみづからのとしごろおちたる歯どもとりおかせたる、二は観音の像あたらしく造立させ侍るに腹身し奉りて、のこり廿あまり侍るををさむとて」。『妙法蓮華經』ナシ。

〔訳〕 年来抜け落ちた歯を取り置かせていたが、納めるとして

どれほど仏法をけなした報いなのだろうか。(阿鼻地獄に) 墮ち尽くした恥ずかしい身で、(歯が) すべて抜け落ちてしまった恥ずかしい身であるなあ。

譬喩品によると、このような経典(法華經)を誹謗する者がいて、經を読んだり書き写して持ったりする者を

見て、軽蔑して憎み嫉み、深い恨みをなす。この人たちの罪の報いを、あなたは今また聞くがよい。彼らの命が尽きると阿鼻地獄に入り、まる一劫（ほとんど無限に近い時間）を経ても、また（阿鼻地獄に）生まれ変わるだろう。このように何回も同じ所に生まれ変わり、永遠にそこで過ごすことになるだろう。地獄から出られなくても、畜生界に堕ちるだろう云々。中略（彼らは人間に）生まれても聾啞であり、身体に障害があるだろう云々。

〔考察〕『妙法蓮華経』譬喩品の一節は、經典をそしる者の罪報を説く。平安後期から仏像の胎内に各種の品を納入する習慣が行なわれ、經典や舍利、文書が多いが、遺骨や奉納者の髪などを納入する例もある。当歌は三条西実隆が高野山に行き、後柏原天皇の爪を奉納した際（710番歌）、新造観音像に自分の歯を二つ、奥院に残りの歯を二十余り納めて詠んだもの。第四句「落ち尽くし」に加齢により歯がすっかり抜け落ちると、悪道にすっかり落ちるとを重ねる。結句の「恥ずかし」は歯が無いからと、成仏できないから。

〔参考〕『新編国歌大観』の詞書は、「高野山道の記」（別称「住吉紀行」等。『実隆公記』所収）と一致する。

（八木智生）

### 神祇

712あらはる、光をあふけこれそ此かけし衣のたまつしまひめ

法華経要文、見于釈教歌。

〔出典〕雪玉集、七二五二番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 神祇

この世に姿を現した(仏の)光を讃仰せよ。これこそが衣に縫い付けた、玉津島姫のように美しく輝く宝珠であるなあ。

法華経の要旨は、釈教歌に見える。(692番歌、参照)

〔考察〕 出典は『妙法蓮華経』五百弟子受記品に見える「衣裏繫珠」。ある貧者が親友の家で、酒に酔い寝ていた間、親友は彼の衣に宝珠を縫い付ける。貧者は気づかないまま帰り、貧しい生活を続けていたが、親友に再会して宝珠を知る。かつて大乘の教えを受けていたのに、後に法華経を聞くまで知らずに悟らなかつたことに例える。法華七喻(682番歌、参照)の一つで、当歌はこれを踏まえて仏を賛美する。「衣のたまつしまひめ」に「衣の玉」と「玉津島姫」を重ねる。玉津島姫は和歌山市の和歌浦にある玉津島神社に祭られている衣通姫（ソトワリヒメ）の異称(750番歌、参照)。記紀に登場する伝説上の女性で、身の光が衣を通して輝くような美しさであったという。713番歌、参照。

(八木智生)

713からころもとをるひかりをやはらけて名もくもりなき玉津嶋姫

日本紀十三卷曰、皇后不獲レ已ム而奏言、「妾弟、名弟姫焉」。弟姫容姿絶妙（ソトワリヒメ）無比。其艶色徹レ衣（ヨリ）而見之。是（イ）以時人号曰（ニ）衣通郎姫也。

〔出典〕 雪玉集、七六二番。日本書紀、卷二三、允恭紀七年二月、一一五頁。

〔異同〕 『新編国歌大観』ナシ。『日本書紀』「容姿絶妙—容姿絶妙」。

〔訳〕 (神祇)

美しい衣を通る光を和らげて、名声も輝かしい玉津島姫だなあ。

日本書紀の卷十三によると、(允恭天皇の) 皇后(忍坂大中姫) がやむをえず天皇に申し上げるには、「私の妹で、名は弟姫」と。弟姫は容姿が絶妙で比べようもない。その美しい色つやが衣を通して輝く。これにより時の人は、名付けて衣通郎姫と申し上げた。

〔考察〕衣通郎姫は712番歌の玉津島姫と同一視され、住吉神とともに和歌神として仰がれた。当歌は色つやが衣を通して輝くという、その名のとおりの衣通郎姫の美しさを詠む。第二・三句の「光を和らげて」は和光同塵(仏が本来の威光を和らげ、煩惱の塵に同じて衆生を救済すること。とくに仏が日本の神として現れること)の「和光」の訓読み。

〔参考〕衣通郎姫は『古事記』(七一二年成立、太安万侶撰)にも登場するが、『日本書紀』とは設定が異なる。『古事記』では允恭天皇の皇女、軽太郎女の別名で、同母兄の軽太子と情を交わし、伊予に流された軽太子を追い、合流したのち心中したと語られる。当歌の作者、三条西実隆は、永正一〇年(一五二三)頃に『日本書紀』を写した。 (湯本美紀)

714いまもかも聞へあけなんすへらさの絶せぬ天の神のよことを

旧事本紀曰、天種子<sup>コトウヂ</sup>命奏<sup>コトウヂ</sup>天神寿詞<sup>コトウヂ</sup>。即、神世古事類、是也云云。

〔出典〕雪玉集、七四六四番。先代旧事本紀、卷七。〔異同〕『新編国歌大観』『先代旧事本紀』ナシ。

〔訳〕(神祇)

きつと今も申し上げているのだろくなあ。天皇への絶えない、天つ神の祝いの言葉を。

旧事本紀によると、(神武天皇即位の時に)天種子命<sup>あめのねこのたまひ</sup>が天つ神の祝いの言葉を申し上げた。すなわち、神代以

来の古い風習の類がこれである云々。

〔考察〕天種子命の子孫である中臣氏は、古代において神事・祭事を司った豪族で、天皇の御代の繁栄を祈った祝い言葉（祝詞のりとや寿詞よじ）を奏上した。  
(湯本美紀)

75さらにこの冬のまつりや千早振かにもいろそふ松のここの葉

古今集、甘巻云、冬の賀茂祭の歌、藤原敏行朝臣

千早振かもの社の姫小松よろつ世ふとも色はかはらし

古今童蒙抄云、冬の賀茂祭といふは臨時の祭を云。

〔出典〕柏玉集、一八六八番。古今和歌集、卷二〇、一一〇〇番。古今集童蒙抄、冬の賀茂の祭のうた。

〔異同〕『新編国歌大観』(神祇)―神社。『八代集抄』『古今集童蒙抄』ナシ。

〔訳〕(神祇)

(例祭に加えて)さらにこの冬の祭は賀茂社に趣を添え、松の葉に深みを添え、和歌にも趣を添えることだなあ。

古今和歌集の第二十巻によると、冬の賀茂祭の歌、藤原敏行朝臣

賀茂社の姫小松は、どれだけの時が過ぎようとも色あせることはないだろう。

古今集童蒙抄によると、冬の賀茂祭というのは臨時の祭をいう。

〔考察〕藤原敏行が賀茂社の小松の色は不変と詠んだのに対して、当歌は「松の葉」のみならず「言の葉」(和歌)や「賀茂」にも「色添ふ」と見なす。「臨時祭」は、賀茂神社において四月の中西日に行われる例祭に対し、十一月の下西日に同社で行われていた祭(233番歌、参照)。寛平元年(八八九)に始まり、応仁・文明の乱が終結した一四

七七年以降は中絶した（所功氏「賀茂臨時祭の成立と変転」、『京都産業大学日本文化研究所紀要』3、一九九八年三月）。詠者の後柏原天皇は一四六四年に生まれ一五〇〇年に踐祚したが、戦国動乱の最中で朝廷の経済は逼迫して、即位式も一五二一年にようやく執り行なわれたほどであるので、当歌は賀茂の臨時祭を想像しての詠作であろう。

賀茂

（橋谷真広）

716 いにしへのかもの川霧立かへりまたかけ見はや山あいの袖

本朝神社考<sup>三</sup>引、寛平御記、見于秋部。

〔出典〕雪玉集、四〇四七番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕賀茂

かつて川霧が立っていた賀茂川で、もう一度また、川面に映った影を見たいものだ、あの山藍の袖（の影を）。

本朝神社考に引かれた寛平御記は、秋部に見える（233番歌、参照）。

〔考察〕「霧立ちかへり」に「霧立ち」と「立ち返り」（再び、という意味の副詞）を重ねる。「霧」は『寛平御記』の一節「天陰霧降」を踏まえる。「山藍の袖」は山藍で模様を摺り染めにし、神事奉仕のために物忌の印として着る小忌衣<sup>せみじょうい</sup>。715番歌と同じく、賀茂の臨時祭の復興を願った歌であろう。

〔参考〕「月さゆるみたらし河に影みえて氷にすれる山藍の袖」（新古今和歌集、神祇、一八八九番、文治六年女御入内の屏風に臨時祭かける所をよみ侍りける、皇太后宮大夫俊成）。

神社

（橋谷真広）

717 あらはれし塩の八百会の幾重共しらぬちかひや住吉の神

神代卷曰、浮<sup>ニ</sup>濯<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>潮<sup>上</sup>、因<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>神、凡<sup>テ</sup>有<sup>ニ</sup>九<sup>ニ</sup>神。其<sup>レ</sup>表筒男命、中筒男命、底筒男命、三神鎮座焉。

中臣祓曰、荒塩乃塩乃八百道乃八塩道能塩乃八百会仁座須云云。

〔出典〕雪玉集、三二六三九番。日本書紀、卷一、神代上、四八頁。中臣祓。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『日本書紀』「凡有九神―凡有九神矣」「其表筒男命、中筒男命、底筒男命、三神鎮座焉―其底筒男命、中筒男命、表筒男命、是即住吉大神矣」。『中臣祓』ナシ。

〔訳〕 神社

多くの潮流の集まる所では、(全貌が)露わになっても潮が幾重になっているのか分からないが、この世に現われた住吉の神への誓いも、幾度立てたか分からないなあ。

(日本書紀の)神代卷によると、(伊弉諾<sup>いざなぎのみこと</sup>尊が)潮の上に浮いてすがれると、これによって神を生み、全部で九神である。そのうち表筒男命、中筒男命、底筒男命の三神が(住吉に)鎮座している。

中臣祓によると、(速開津比売<sup>はやあきのひめ</sup>という神は)とても多くの激しい潮流が交じり合う場所におられる云々。

〔考察〕神代卷は、黄泉の国から戻った伊弉諾尊が禊・祓をした場面(136番歌、参照)。『中臣祓』は海へ運ばれた罪や穢れを速開津姫が呑みこむ箇所。「八塩道」は多くの潮路、「塩の八百会」は多くの潮流が集まること、またその場所。当歌の「あらはれし」は潮と神を、「幾重とも知らぬ」は潮と誓いをそれぞれ修飾する。

〔参考〕『中臣祓』の本文は諸本により異なるが(詳細は『神道大系』所収「中臣祓註釋」解題、参照)、『延喜式』所載の大祓詞と一致する。

(嶋中佳輝)

718 見すやそのから神とてもすへらきの御垣の内にあとをたれける

延喜式、三、名神祭部曰、園神社一座、韓神社二座、已上座三宮内省ニ。

〔出典〕雪玉集、二五二三番。延喜式、卷三、神祇三、臨時祭。

〔異同〕『新編国歌大観』「あとをたれける―跡をたれけり」。『延喜式』ナシ。

〔訳〕（神社）

知らないことがあろうか。その韓神（は渡来の神である）といっても、天皇の（住む）皇居を囲む垣根の中に垂迹されたことを。

延喜式、卷三の名神祭の部によると、園神社が一座、韓神社が二座、以上が宮内省に鎮座する。

〔考察〕園神も韓神も宮中に祭られていた神で、『延喜式』では「名神祭二百八十五座」の最初に置かれている。韓神とは朝鮮半島から渡来した神の意であり（318番歌参照）、当歌は異国の神が宮中の守護神になっていることを詠む。  
（嶋中佳輝）

社頭榊

719 <sup>榊</sup>松もいさいく度霜に顕れて神代おほゆる榊葉の陰

朗詠詩句、見于恋部。

〔出典〕柏玉集、一八七四番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 社殿の榊

松もさあ何度、霜枯れの中から現われたか知らないが、同じように何度も霜の中から現われて、神々の時代のこと

が思い出される榊葉の姿(もまた不変) だなあ。

和漢朗詠集の詩句は、恋の部に見える。(389番歌、参照)

〔考察〕 389番歌の出典「十八公采霜後露」を当歌は踏まえて、いかなる環境にも負けず不変の緑を保つ松を引き合いに出し、同じく常緑樹である榊の不変さを詠む。(溝口利奈)

720霜さやく暁さむし神垣にとるもうたふもさかさ葉の声

梁塵愚案抄、神楽部、同採物歌、榊。榊葉の香をかくはしみ―

〔出典〕 雪玉集、二五三三番。梁塵愚案抄、卷上、神楽部、採物歌、榊。

〔異同〕 『新編国歌大観』『梁塵愚案抄』ナシ。

〔訳〕 (社殿の榊)

霜が音をたてるほどの夜明け前は冷えこむなあ。神社で手に取る(神降ろしの物)も榊、神を招く歌も神楽歌  
「榊」で、榊の葉擦れの音がするなあ。

梁塵愚案抄、神楽の部、同じ採物歌、榊。榊の葉の香りがよいので(下略)。

〔考察〕 出典の歌の全文は「賢木葉の香をかくはしみ尋め来れば八十氏人ぞまとゐせりける」(榊の葉の香りがよいので、その場所を求めて尋ねてくると、多くの氏の人たちが楽しそうに寄り集まっていることだ)。神楽歌とは、広義では神前で舞楽と共に唱和される歌謡、狭義では宮中で行われる神事歌謡をいう。採物歌は、神が降りる物を持って演じる曲の部類(採物については722番歌の解説参照)。当歌の結句「榊」に、舞い人が手に持つ榊と神楽歌の「榊」を重ねる。(溝口利奈)

寄榊神祇

721 かく山の榊ほりうへし其跡を世々にうつせる神あそひ哉

神代卷曰、於是天ノ児屋命、掘<sup>ネコシテ</sup>天香山之真坂木<sup>マサカキ</sup>、而上<sup>ノ</sup>枝<sup>エ</sup>懸<sup>ニ</sup>以鏡作<sup>シテ</sup>遠祖天抜戸児巳凝戸辺所<sup>ト</sup>作<sup>レ</sup>八咫

鏡<sup>ニ</sup>云云。広<sup>ク</sup>厚<sup>ク</sup>称<sup>シ</sup>辞<sup>ヲ</sup>祈<sup>ヒ</sup>啓<sup>ス</sup>矣。

〔出典〕雪玉集、四八四五番。日本書紀、卷一、神代上、八五頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「かく山の―香久山の<sup>古</sup>」。『日本書紀』「掘―握」。

〔訳〕榊に寄せる神祇

香久山の榊を掘り取り（天<sup>あまの</sup>石窟<sup>いわや</sup>の前に）植えたという、その事跡を代々に伝えている神楽だなあ。

神代卷によると、ここに天児屋命<sup>あまのやねのみこと</sup>は天<sup>あまの</sup>香久山の真坂木<sup>まさかき</sup>（榊）を根の付いたまま掘り取り、上の枝には鏡作り

の遠祖天抜戸の子である巳凝戸<sup>おのこり</sup>辺<sup>へ</sup>が作った八咫鏡<sup>やたかがみ</sup>を掛ける云々。（天児屋命は太玉命に榊を持たせて）広く懇

ろに祝詞を祈り申し上げさせた。

〔考察〕当歌の結句「神遊び」は神楽（神を祭るための舞楽）を指す。当歌は天石窟に籠った天照大神を誘い出すた

め、諸神が祈禱する場面を踏まえ、その事跡を伝承する神楽を詠む。香久山は、高天原<sup>たかまがら</sup>の山が地上<sup>くた</sup>に降ったとさ

れ、「天<sup>あま</sup>の香久山」と称される。（丹羽雄一）

722 榊<sup>ト</sup>神<sup>カミ</sup>わさや声<sup>こゑ</sup>のうちにも榊葉<sup>ト</sup>の末葉<sup>ト</sup>もとつ葉茂りあふまで

神楽、採物歌、榊。さかさ葉<sup>ト</sup>の香を―

榊<sup>ト</sup>かきのみむろの山の榊葉は神のみまへに茂りあひにけり

〔出典〕柏玉集、二四〇〇番。雪玉集、四八四四番。梁塵愚案抄、卷上、神楽部、採物歌、榊。

〔異同〕『新編国歌大観』「声のうちにも―声の中にも」(柏玉集、雪玉集)「寄榊神祇」―寄榊述懐」(柏玉集)。『梁塵愚案抄』ナシ。

〔訳〕(榊に寄せる神祇)

靈妙不可思議だなあ。(神楽歌「榊」の)本歌と末歌を歌う声がするうちにも、榊の枝の若葉と古葉が茂り合うほどまで(になつたなあ)。

神楽、採物歌、榊。榊本歌の葉の香りが(下略。720番歌の「考察」に掲載)。

神本歌が降臨した神聖な山の榊の葉は(神を讃えるように)神の御前で茂り合つたことだなあ。

〔考察〕採物採物は、神楽の時に舞人が手に持つ依代よりしろ(榊、幣、杖、篠、弓、劍、鉾、杓、葛の九つ)をいう。採物歌は、

人長にんじょう(舞い人の長)が採物を手に持って奏する楽の歌で、本歌と末歌を唱和する。なお「榊」の本歌は『拾遺和

歌集』(巻一〇、神楽歌、五七七番)に、末歌は『古今和歌集』(巻二〇、神遊びの歌、採物の歌、一〇七四番)に

採録。末歌の初句「神垣の」は「御室」(神が鎮座する場所)にかかる枕詞。当歌は第三句「榊葉」に神楽歌の

「榊」、第四句「末葉」(枝先の葉)に「末歌」、「もとつ葉」(幹に近い葉)に「本歌」を重ねる。(丹羽雄一)

寄月神祇

723同住よしや月もあらはれ出るよはあはきか原の影もくもらて

神代卷、見于夏祓註。

〔出典〕柏玉集、一八七一番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 月に寄せる神祇

住吉で月も（海上から）現われ出る夜は、（住吉三神が潮から現われた）櫛原の月影も曇らないで（澄んでいるなあ）。

神代卷、夏祓の注に見える。（136番歌、参照）

〔考察〕 住吉神社の祭神は、伊弉諾尊が櫛原あわきはらで禊祓をして生んだ表筒男命、中筒男命、底筒男命の三柱の神。当歌は、

櫛原で生まれた住吉三神の謂れ（17番歌、参照）を踏まえ、住吉と櫛原の結び付きを詠む。

〔参考〕 類歌「西の海やあはさの浦の潮路より現はれいでし住吉の神」（続古今和歌集、卷七、神楽歌、七二七番、卜部兼直。光俊朝臣よませ侍りける住吉社三十首に神祇を）。（丹羽雄一）

寄鏡神祇

724碧今は世に神をか、みそ岩戸出て見し影おもへあまのかく山

古語拾遺、註于冬部神楽歌。

〔出典〕 碧玉集、一二二九番。〔異同〕 『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 鏡に寄せる神祇

今はこの世で神を鏡（として仰ぐこと）だ。（天照大御神が）岩戸を出て見た、天の香久山の（櫛に付けられた）鏡に映ったお姿を思い起こしなさい。

古語拾遺は冬部の神楽歌に注す。（315番歌、参照）

〔考察〕 『古事記』等に見える天岩戸伝説を踏まえる。素戔嗚尊すさのおのこの狼藉に怒った天照大御神あまてらすおのみかみは天の岩戸に隠れてしま

い、天地は常闇となる。困った神々は一計を案じ、祝詞や舞で騒ぎ立てた。すると大御神は天岩戸の扉を少し開け、「なぜ、そのようなことをしているのか」と尋ねた。天宇受売あめのうずめが「あなたより貴い神がいらっしやるので、喜んで歌舞をしているのです」と言い、天兎屋命あめのうさぎと布刀玉命ふたぎのたまが天照御大神に鏡を差し出した。不思議に思った大御神が少しずつ岩戸から出て、鏡に映った姿をのぞき見されると、隠れていた天手力男神あめのぢからのかみがその手を取って岩戸の外へ引き出し、世は再び明るくなった。鏡は「天の香久山」から採ってきた榊に付けられていた(72番歌、参照)。

(八木智生)

寄車神祇

725しめのうちにみつはさすまで老ぬ也くるまをかけよ神のみや人

白虎通曰、臣七十懸レ車ヲ致レ仕者ハ、以ニ執レ事ヲ趨ス走ル為レ職。七十ニシテ陽道極リ耳目不ニ聡明ニ跛躄之屬アリ。是ヲ以退去、避レ賢ヲ者所三以長ニ廉ト恥一也。懸ルコトハ車ヲ示レ不レ用也。

〔出典〕雪玉集、二八四五番。白虎通義、卷二、致仕。

〔異同〕『新編国歌大観』「みつは―三輪」。『白虎通義』「以執事趨走―臣以執事趨走」。

〔訳〕車に寄せる神祇

神社の境内で(長年、神に仕えて)新しく齒が生えるほど老いてしまった。車を懸けてくれ、神官たちよ。

白虎通によると、臣下が七十歳になり馬車を高い所に置いて引退するのは、(臣下という者は)事務を取り仕切って奔走するのが仕事であるのに、七十歳になるとプラスのエネルギーが極点に達し(て、その後は衰えるばかりで)、耳や目も悪くなり、足を引きずるようなことがあるからだ。それゆえ宮廷を去り賢人に道を譲る

のは、清廉潔白で恥を知る気持ちを高める手段である。馬車を高い所に置くのは、もう車を使わ(ず出仕)しないことを示すためである。

〔考察〕「懸車」は任を退くこと。漢の薛広徳が退官した時、天子から賜った車を高所に掛けてつるし、記念として子孫に残したという『漢書』「薛広徳伝」の故事による(644番歌、参照)。「しめのうち」は神社の境内の意。「瑞齒」は老齢になり抜けてからもう一度生えた歯で、長寿の吉相。転じて、「瑞齒さす」は非常に年をとる、の意。当歌は、年老いた神官が辞職を望む歌。(八木智生)

#### 水石歴幾年

726 池水の世々の岩ほもさ、れ石にかへしてやみんあまの羽ころも

楼炭経、出于七夕歌註。

〔出典〕雪玉集、一二三三番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕水辺の石、何年も経つ

池の水に代々そびえ立っている大きな岩も、細かい石に戻してみようか、天の羽衣をひるがえして。

楼炭経は「七夕」歌の注に掲出した。(157番歌、参照)

〔考察〕「岩ほ(巖)」はそびえ立つ大きな岩、「さざれ石」は細かい石のこと。「かへして」に巖が細れ石に戻るといふ意の「還して」と、天の羽衣をひるがえすといふ意の「返して」を掛ける。157番歌の出典によると、百年に一度だけ天人が地上に降り、一辺が四十里もある大石を天衣で撫で、ついに石は無くなっても劫はまだ続いている、という。また「巖」と「さざれ石」を詠み合わせた例として、「わが君は千代に八千代にさざれ石のいはほとなりて

苔のむすまで」(古今和歌集、賀、三四三番)があり、当歌はそれを逆転して、羽衣で巖をさざれ石にすると詠む。  
(湯本美紀)

松有歓声

727花になくうくひすも先万代の声には松をためしとやきく

古今序の詞、たひくしるし侍りぬ。

〔出典〕雪玉集、二二六一番。古今和歌集、仮名序。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕松(風の音)に歓声あり

花に鳴く鶯も、まずは万歳の声では松を模範として聞くだろうか。

古今和歌集の序文は、たびたび記しました。(14番歌、参照)

〔考察〕「万代の声」とは、今の御代が永久に栄えることを祈り讃える声。当歌は『古今和歌集』仮名序の一節、「花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。」(すべての生き物は歌を詠む)と、常緑樹の松の不変さを踏まえて、歌を詠む鶯も松風の音に万歳の声を聞くだろうかと詠む。  
(湯本美紀)

七夜

728かそふれはけふこそ七夜あか玉の明る日毎に光そはなむ

神代卷曰、既児生之後天孫就而問曰云云。于時豊玉姫命寄玉依姫而奉報歌曰、「阿軻娜磨廼比訶利播阿利登比鄧播伊珮耐企珥我譽贈比志多輔妬勾阿利計利」。

〔出典〕雪玉集、四三四一番。日本書紀、卷二、神代下、一七八頁。〔異同〕『新編国歌大観』『日本書紀』ナシ。

〔訳〕七夜

数えれば今日こそ七夜、赤玉（赤ん坊）は日が改まるごとに光が加わってほしい。

（日本書紀の）神代卷によると、既に子が生まれて後、天孫（父の彦火火出見尊あめのみま）が行って（豊玉姫に歌を詠んだ）云々。その時、豊玉姫は玉依姫たまよりひめに託して、次の返歌を奉った。「赤玉（赤ん坊）の光はすばらしいと人は言うけれども、あなた（彦火火出見命）の容姿はそれよりはるかに貴い」。

〔考察〕豊玉姫は海神の娘で、彦火火出見尊と結ばれるが、尊が姫の頼みに背いて出産時に覗き見たため海に帰り、妹の玉依姫に養育を頼んだ箇所。歌題の「七夜」は子どもが生まれて七日目の祝いの夜のこと。当歌は生後七日目を祝い、日が明けるにつれて赤ん坊がさらに立派に育つことを寿ぐ。

〔参考〕一四世紀に成立した『源氏物語』の注釈書『河海抄』には、光源氏をさす「たまのおのこみこ」（桐壺の巻）について、「あかたまとは子也。子を玉にたとへたる也」と注して、前掲の出典本文を挙げる。結句の読みは「多輔タフ妬勾トクア阿利計利アリケリ」。なお『古事記』上巻では、「赤玉は緒さへ光れど白玉の君が装し貴くありけり」という別の歌を載せる。（湯本美紀）

### 対亀争齡

729 契碧りなを宿に尽せぬ齡かなたからのためのすめる池水

史記、亀策伝。凡八名亀。々図各有レ文在ニ腹下ニ、文ニ云ニ云スル者、此某之亀也。略記ニ其ノ大指ヲ、不レ写ニ其

図ヲ。取ニ此ノ亀ニ必ス満ニ尺ニ寸ニ、民人得ニテモ長七八寸ヲ、可レ宝トス矣。

〔出典〕碧玉集、一一一四番。史記、卷二二八、龜策列伝、三〇五頁。〔異同〕『新編国歌大観』『史記』ナシ。

〔訳〕 龜と年齢を争う

(長寿の) 約束は今なお、この家に尽きないほどの寿命だなあ。(その証として) 宝とする靈龜が棲んでいる澄んだ池の水よ。

史記の龜策伝。(古書によると) 全部で八種類のすぐれた龜がいる。龜の図にはそれぞれ腹の下に文字が書かれ、文字に何々とするのは、これがどの種の龜かということである。ここでは大まかにそのあらましを記して、龜の図を写すのは省略する。このすぐれた龜を手に入れる場合、必ずしも一尺二寸の大きさに達していなくてもよく、民衆は長さが七、八寸のものを得ても珍重するに値する。

〔考察〕 龜策列伝は列伝七十巻のうち第六十八に属するが、主に古代中国における占いの方法や内容を記述したもので、一般的な列伝の形式ではない。ただし龜策列伝は早くに散逸して、現存するのは後世の作とされ、引用箇所は占いに用いる龜の靈妙さを述べる。当歌は「すめる」に「棲める」と「澄める」を掛ける。

〔参考〕『碧玉集』は歌題の下に「左衛門督家会始に」とあり、当歌は左衛門督家の歌会始で詠まれ、当家を寿ぐ。

(嶋中佳輝)

730 あひにあひてねの名におへる文の龜のよはひも君か万代のため

事文類聚。堯沈<sub>ニ</sub>壁<sub>ヲ</sub>於洛<sub>一</sub>、玄龜負<sub>レ</sub>書<sub>ヲ</sub>出<sub>ツ</sub>。於背<sub>上</sub>赤<sub>ニ</sub>文<sub>ニ</sub>朱<sub>ニ</sub>字<sub>一</sub>。

〔出典〕 雪玉集、一三三〇二番。新編古今事文類聚後集、卷三五、洛出書。

〔異同〕『新編国歌大観』「よはひも君か―齒比裳喜美賀」。『新編古今事文類聚』ナシ。

〔訳〕（亀と年齢を争う）

（故事に）まさしく符合して「子」<sup>ね</sup>（すなわち玄）という名を持っている、（背に）文字がある玄亀の年齢も、主君の万世のためであるなあ。

事文類聚。堯が（七十歳の時、洛水のほとりに壇を築き、儀礼を執り行ない、）璧玉を洛水に沈めたところ、（夕方になり、洛水に光があふれ）玄亀が洛書を背負い（洛水から）出現した。亀の背上には赤い模様を描かれ、文字になっていた。

〔考察〕当歌は干支の「子」が北の方角を示し、北の守護神である玄武（亀の形）を連想させ、出典の「玄亀」と絡めて帝の統治を寿ぐ。出典の一節「赤文朱字」は意味が重複して動詞を欠き、意味が通じないので、「朱」は草書体が似ている「成」の誤写と見なして解釈した。

〔参考〕『雪玉集』の和歌が万葉仮名で表記されているのは、背に漢字が書かれた亀の故事にちなむと考えられる。出典は有名な緯書『尚書中候』の一節。緯書は経書（儒教の古典）を補い、未来を予言する書。（嶋中佳輝）

亀万年友

碧<sup>731</sup>をのか住水のみとりのかめもしれ君にかそふるよろつよの春

〔出典〕碧玉集、一一一三番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 亀は万年の友

私が生んでいる家の、澄んだ緑色の池に生息している緑毛亀も知りなさい。主君に数えあげる、いつまでも続く春を。

〔考察〕 出典は732番歌と同じ。「住」に「澄む」を掛け、「水の緑の亀」に「水の緑」と「緑の亀」を重ねる。当歌は、長寿の象徴である緑毛亀を友とする主君を寿ぐ。

寄亀祝

732池水同のかれぬためしも住かめのをのかみとりの万代の影

類書纂要曰、緑毛亀、蕪州ニ出、背ニ有「緑毛」、浮ニ水中ニ則毛浮起、能ク避「風塵」、置「壁」数年不「死」云云。

〔出典〕 碧玉集、一二九三番。古今類書纂要、卷八、鱗介部、亀。

〔異同〕 『新編国歌大観』ナシ。『古今類書纂要』「緑毛亀―緑毛亀」「避―辟」。

〔訳〕 亀に寄せる祝い

池の水が枯れない例も、その緑色の池に生息している亀自身に緑の毛が付き、いつまでも生き長らえている姿（と同じで瑞祥）だなあ。

類書纂要によると、緑毛亀は蕪州に現れ、背中に緑色の毛をもち、水中に浮くとその毛も浮き上がり、風塵を避けることができ、壁に置くと数年は死なない云々。

〔考察〕 「緑毛亀」とは「蓑亀」とも言い、甲羅に藻が付着した老いた亀で、長寿や嘉瑞の印として珍重された。当歌の「緑」は池水と亀を修飾する。『碧玉集』は歌題の下に「左衛門督家会当座に」とあり、当歌は池の水が枯れない例や、その池に住む緑毛亀の例を引いて、左衛門督家を寿ぐ。当家の歌会については729番歌、参照。

（溝口利奈）

733 春秋にとみのを川の絶すしてわか君か代のすまんひさしき

史記、秦本紀。今階下富於春秋。

〔出典〕雪玉集、三六五二番。史記、秦始皇本紀、第六、三七七頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「すまんひさしき―すまんひさしき」。『史記』「階下―陛下」。

〔訳〕慶賀

富緒川とみのおがわが絶えずに久しく澄んでいるように、春秋に富む少壮の我が主君も末久しく住み続けることだなあ。

史記の秦始皇本紀。今、陛下はまだ年少である。

〔考察〕「春秋に富む」は若く少壮である意。663 番歌にも用例が見られるが出典箇所は異なり、ここでいう「陛下」は秦の二世皇帝（胡亥）を指し、始皇帝の側近であった趙高が、即位したばかりの二世皇帝を説く一節。「春秋にとみのを川」に「春秋に富み」と「富緒川」（奈良具生駒郡斑鳩町にある歌枕。法隆寺の東を流れる川）を重ね、「すまん」に「澄まん」と「住まん」を掛ける。当歌は、若い主君の世が長く続くことを祝う。

〔参考〕聖徳太子に対して、飢え人が返した歌「斑鳩いかにがやとみの小川の絶えばこそ我が大君の御名みなを忘れぬ」（拾遺和歌集、哀傷、一三五二番）により、富緒川は「絶えず」「万代」などの語と詠まれることが多い。（溝口利奈）

祝

734 時をかへぬ恵に今やうるふらん十日の雨の遠つ国まで

王充、論衡曰、太平ノ之世、五日一風、十日一雨、風不レ鳴レ枝ヲ、雨不レ破レ塊ヲ。

〔出典〕雪玉集、三八五三番。論衡、是応第五二、一二二頁。円機活法、雨。



〔出典〕雪玉集、五〇五一番。十八史略、卷一、春秋戦国、九四頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『十八史略』「奈何以万乘国而无宝焉―ナシ」「不敢為寇泗上―楚不敢為寇泗上」「此四臣―此四臣者」。

〔訳〕（祝）

いつまでも御代が続く君主の宝は賢臣で、彼らに匹敵する玉もないほどの光で（彼らは光り輝いているで）あろう。

十八史略によると、（斉の）威王が、（魏の）恵王と城外の地で会合して狩りをした。恵王が（威王に）、「斉国には何か宝があるか」と言った。威王は、「何もない」と答えた。（すると）恵王は、「私の国は小さな国ではあるが、それでも直径一寸の珠で、馬車の前後それぞれ十二台分（の距離）を照らすものが十個ある。どうして大国（斉）に宝がないのか」と言った。（そこで）威王は、「私の宝は、あなたのととは異なっている。私の家に檀子という者がいる。（檀子に）南城を守らせたところ、（斉の南隣の楚は恐れて）強いて（斉の南方を流れる）泗水のほとりに攻め入ろうとは、しなくなった。（楚の）十二の諸侯が皆（斉に）来朝するようになった。（また）盼子という者がいる。（盼子に）高唐を守らせたところ、（斉の西隣の）趙の人々は、強いて東の（国境にある）黄河で魚を獲ろうとは、しなくなった。（また）黔夫という者がいる。（黔夫に）徐州を守らせたところ、（斉の北隣の）燕の人々は（斉の）北門で祈願し、（斉の西隣の）趙の人々は（斉の）西門で祈願して、自国に攻め込まれないように願った。（また）種首という者がいる。（種首を）盗賊の取り締まりにあたらせたところ、（人々は）道に落ちていているものを拾わなくなった。この四人の家臣は千里までも照らすであ

ろう。どうしてただ、馬車十二台分(の距離)を照らすだけだろうか」と言った。恵王は赤面した。

〔考察〕「万乗の国」は戦時に一万台の兵車を出せた国を指し、大国を意味する。集付は『碧玉集』であるが、当歌は『雪玉集』に所収。

〔参考〕注釈本文の「照車前後各十二乗者十枚。」までの部分は、112番にも見える。なお、『史記』卷四六、田敬仲完世家第一六にも、同じ話を掲載する。また、「道<sup>二</sup>不<sup>レ</sup>拾<sup>レ</sup>遺<sup>テ</sup>」は739番歌の出典にも見られる。(丹羽雄一)

祝言

736君をいのる心をとほ、三笠山空にこたふるよろつ代の声

漢書、見于春部。

〔出典〕雪玉集、二五四四番。〔異同〕『新編国歌大観』「心をとほ、一心をさぞな」。

〔訳〕 祝言

帝(の繁栄)を祈る心を(神仏に)問うてみれば、三笠山の空に答える万代の(繁栄を祝う)声(が聞こえるの)だなあ。

漢書は、春部に見える。(60番歌、参照。)

〔考察〕三笠山は歌枕で、奈良市東部にある山。「万代の声」は727番歌、参照。武帝が嵩高山に登った時、山神が万歳を三唱するのを吏卒たちが皆聞いた、という『漢書』の故事になぞらえて、当歌は天皇の万代の繁栄を予祝する。

(八木智生)

737糸竹にうつして聞もをのつから枝をならさぬ風の声く

論衡、見右。

紀納言、風中ノ琴ノ賦ニ曰、有レ琴ニ於是<sup>コレニ</sup>、成<sup>レ</sup>韻ヲ乎風ニ云云。

〔出典〕雪玉集、四八五三番。本朝文粹、第一。〔異同〕『新編国歌大観』『本朝文粹』ナシ。

〔訳〕（祝言）

（太平の世には）風は枝を鳴らすほどには吹かないが、風の音を楽器の演奏に移して聞いても、自然と枝を鳴らさない（ほど穏やかな音だ）なあ。

論衡は前を見よ。（734番歌、参照）

紀長谷雄の風中琴賦によると、ここに琴があり、風が音楽に聞こえる云々。

〔考察〕『論衡』は太平の世の印として、「風不鳴枝」を挙げる。紀長谷雄の漢詩「風中琴賦」は、風の音に琴の音色が自然に聞こえ、琴の調べと風の音が入り混じる趣をうたう。「糸竹」は絃楽器と管楽器の総称。当歌は楽器の音と風の音が混然一体となり、枝を鳴らさない風の音を楽器の音色に譬え、太平の世を賛美する。「竹」と「枝」は縁語。

〔参考〕「琴の音に峰の松風かよふらしいづれのをより調べそめけん」（和漢朗詠集、巻下、管絃、四六九番、斎宮女御）。（八木智生）

738 しら波のよるとさしもわすれ貝ひろふ人なき道のた、しさ

〔出典〕雪玉集、四六五三番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕（祝言）

白波が寄るではないが、白波(盗人)が忍び寄る夜の門戸の戸締りも忘れ、忘れ貝を拾う人もいない道の正しさよ。

〔考察〕出典は739番歌と同じ。「白波」は黄巾賊の郭泰らが白波谷で蜂起し、それを白波賊と呼んだことから盗人の異称。「よる」に「寄る」と「夜」を掛け、「忘れ貝」に動詞「忘れ」を重ねる。「忘れ貝」は離れてしまった二枚貝の一片を指し、これを拾えば恋しくつらい思いを忘れられるとされた。当歌は、盗賊に襲われる心配もなく、つらさを忘れる忘れ貝を拾う人もいない正道の世を祝う。(湯本美紀)

寄道祝言

739かしこしな道のゆくてのわすれ貝そをたにひろふ人もなき世は

後漢書。白波賊、見于冬部。

淮南子、卷六、覽冥訓曰、昔者黄帝治天下、而力牧、太山稽輔之云云。百官正<sub>シテ</sub>而無<sub>レ</sub>私、上<sub>レ</sub>下調而無<sub>レ</sub>尤<sub>レ</sub>、法令明<sub>ニシテ</sub>而不<sub>レ</sub>闇、輔佐公<sub>ニシテ</sub>而不<sub>レ</sub>阿。田<sub>ツク</sub>者不<sub>レ</sub>侵<sub>レ</sub>畔<sub>ヲ</sub>、漁<sub>ト</sub>者不<sub>レ</sub>争<sub>レ</sub>隈<sub>ヲ</sub>、道<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>捨<sub>レ</sub>遺<sub>タルヲ</sub>云云。

史記、孔子世家<sub>ニ</sub>曰、男<sub>ヲ</sub>女<sub>ヲ</sub>行<sub>ク</sub>者別<sub>ニ</sub>於<sub>テ</sub>塗<sub>ヲ</sub>々<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>捨<sub>レ</sub>遺<sub>タルヲ</sub>云云。

〔出典〕雪玉集、二五六一番。淮南子、卷六、覽冥訓、三〇六頁。史記、孔子世家、定公一四年、八二四頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「人もなき世は一人もなき世に」。『淮南子』「道不捨遺―道不捨遺」。『史記』ナシ。

〔訳〕道に寄せる祝言

すばらしいことだなあ。道の行く手にわすれ貝があっても、それをさえ拾う人もいない世の中は。

後漢書の白波賊は冬部に見える。(326番歌、参照)

淮南子の卷六、覽冥訓によると、むかし黄帝が天下を治めた時、力牧と太山稽は補佐の役にあつた云々。諸々の役人は公正で私心がなく、身分の高い者も低い者も心を合わせて尤（過ち）を犯さず、法令は明らかに施行され曖昧さはなく、補佐の者は公平で（君主に）へつらうことはない。農民は田畑の畔（境界）を侵さず、漁師は川の曲がり角（よい漁場）を争わず、道端で落ちてゐる物を拾う（よこしまな）者はいない云々。史記の孔子世家によると、（世が落ちつく）往来する男女は別々の道を歩くようになり、道に落ちてゐる物を拾わなくなった云々。

〔考察〕当歌は、心の憂さを忘れられるという忘れ貝すら拾う人がいないほど、公正で秩序のある世の中を祝福する。道に落ちてゐる物を拾わないは、735番歌の出典にも見られる。（湯本美紀）

#### 祝言

740はるかなる天のうきはし絶せし世のことわざや言のはのみち

神代卷。註于寄橋恋歌。

〔出典〕雪玉集、四六五二番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

#### 〔訳〕 祝言

遙か遠い昔、（伊弉諾尊と伊弉冉尊が言葉を交わした）天の浮橋は、（その昔から）絶えることのない（そしてこれからも続いていく）世の営みであるなあ。和歌の道（も同じで永続することだなあ）。

神代卷。「寄橋恋」歌に注す。（444番歌、参照）

〔考察〕当歌は、伊弉諾尊と伊弉冉尊による国産み神話を踏まえ、結婚や出産などの営みが神代から当代、そして未

来へと続いていくように、世の繁栄と和歌の隆盛を寿ぐ。

(橋谷真広)

社頭祝

741民の草おきふしあふけ天の下うるふ水穂の国つやしろを

神代卷。「有豊葦原千五百秋瑞穂之地<sup>ミソホ</sup>」。宜汝往循之<sup>ウツ</sup>」云云。

〔出典〕雪玉集、七六七四番。日本書紀、卷一、神代上、二八頁。〔異同〕『新編国歌大観』『日本書紀』ナシ。

〔訳〕 社殿の祝

人々よ、寝ても覚めても仰ぎ見よ。この天の下を潤し、(瑞々<sup>みずみず</sup>しい稲穂が収穫できる) 日本国を守護する神を祭る社を。

神代卷。(天神<sup>あまつかみ</sup>が伊弉諾尊<sup>いざなぎのみこと</sup>と伊弉冉尊<sup>いざなみのみこと</sup>に次のように言った)「豊葦原千五百秋瑞穂<sup>とよあはらのちいほあきのみづほ</sup>の国がある。あなた方が行って治めなさい」云々。

〔考察〕「豊葦原千五百秋瑞穂之地」は「豊かな葦の茂る原で多くの稲穂がいつまでも収穫できる国」の意で、日本国の美称。「民の草」は民が増えるのを草に例えたもので、人々の意。「水穂の国つやしろ」に「瑞穂<sup>みずほ</sup>の国」(稲穂がよく実る国の意で、日本国の美称)と「国つ社<sup>やしろ</sup>」(「国つ神」を祭る神社)を重ねる。「国つ神」は天孫(天つ神<sup>あまつかみ</sup>)の子孫。伊弉諾尊・伊弉冉尊など)に対して、天孫が天降る以前から日本の国土に住んで治めていた土着の神々を意味する。当歌は日本の国の豊かさ、それを守護する神々を祀る社を祝う。(橋谷真広)

社頭祝言

742まもるには神と君との中筒男へたてぬ道にたつ波もなし

碧住吉法樂

〔出典〕碧玉集、一三〇六番。〔異同〕『新編国歌大観』「社頭祝言―住吉社法楽資直勧進に、おなじ心を」。

〔訳〕社前の祝言

（国を）守るには中筒男命の神と帝との仲を隔てないことであり、（そうすれば航海の）道には立つ波も無い。

〔考察〕住吉大神（表筒男命、中筒男命、底筒男命）の三神は航海神として祀られ、朝廷の尊崇を受けた（723番歌、参照）。当歌は「中筒男」の「中」に「仲」を掛け、「道」に道中と方法という意味を重ね、住吉大神と天皇の良好な関係により、航海の安全が保障されることを寿ぐ。結句の「立つ波も無し」とは海が穏やかで、水難がないことを意味する。

〔参考〕異本の「おなじ心」は、『碧玉集』一三〇五番の詞書「社頭祝言 左衛門督家当座」の歌題を指す。「左衛門督家」は729・732番歌にもあり。

（橋谷真広）

743跡たれし誓のまゝの底筒男世を守る道の浅からめやも

神代巻。註于神祇歌中。

〔出典〕雪玉集、六三三二番。〔異同〕『新編国歌大観』「社頭祝言―社頭祝」「ま、の―うみの」。

〔訳〕（社前の祝言）

神の姿となり衆生を救おうとした仏の誓いの通り、底筒男命がこの世を守る道は浅いだろうか。いや、そのようなことはないなあ。

神代巻。神祇歌の中に注す。（717番歌、参照）

〔考察〕「跡たれし」は、仏や菩薩などが人々を救うため、神の姿で現世に現れること。伊弉諾尊が黄泉国での穢れを

濯ぐために禊をした際、海の底での濯ぎで生まれたのが底筒男命、潮の中に潜つての禊で生まれたのが中筒男命（42番歌）、潮の上での禊で生まれたのが表筒男命。異文の「誓いの海」は、仏が衆生を救い導く誓いの広く深いさまを海に譬えた語で、「誓いの海の底筒男」に「誓いの海」「海の底」「底筒男」を重ねる。（橋谷真広）

寄亀祝

744<sup>柏</sup>よろつ世もかはらぬみちに尋ねみん亀のうへなる大和ことの葉

列子。見于春部。

〔出典〕 柏玉集、一八九八番。〔異同〕 『新編国歌大観』「寄亀祝―亀万年友」「よろつ世も―万代を」。

〔訳〕 亀に寄せる祝い

亀の上にある五山のように、永久に変わることのない道を和歌に探してみよう。

列子。春部に見える。（37番歌、参照）

〔考察〕 当歌は「亀の上なる大和言の葉」に「亀の上なる山」と「大和言の葉」（和歌）を重ねる。「亀の上なる山」は『列子』湯問篇で語られる、亀の頭上にある五つの山で、そこには不老不死の仙人が住む。そのように歌道も「よろづ世も変はらぬ道」であることを讃える。（嶋中佳輝）

寄国祝

745 君と臣の道ある国そすむを空にこるをつちとわかち置より

神代卷。註于雑部卷頭。

〔出典〕 雪玉集、二五五一番。〔異同〕 『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 国に寄せる祝い

（この日本国は）君臣の道がある国だなあ。澄んでいる気を空に、濁っている気を土に分けておいた（天地開闢の）時から。

神代卷。雑部の巻頭に注す。（488番歌、参照）

〔考察〕当歌は日本国始まって以来、「君」（天皇）と「臣」（臣下）が区分され、その交代が起こっていないことを、『日本書紀』に記された天地開闢において天と地が分かれたことになぞらえて寿ぐ。ただし『雪玉集』の歌肩には「于文明十三」と記され、当歌が詠まれた文明一三年（一四八一）は応仁の乱以後、下剋上の風潮が蔓延する中であり、君臣関係の永続を祈った歌と解される。（嶋中佳輝）

寄書祝

746かしこしなむすひし縄も世になかくくちせぬ筆の跡にかへける

史記。見于書歌註。

〔出典〕雪玉集、二五四九番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 書に寄せる祝い

立派なことだなあ。結んで（記録して）いた縄も、この世で末永く朽ちることのない筆跡に代えたのだなあ。

史記。「書」の歌の注に見える。（642番歌、参照）

〔考察〕『史記』三皇本紀における、庖犧氏が結縄の政を文書契約に改めた記述を踏まえ、縄と異なり朽ちることのない書跡の永続性を称賛する。（溝口利奈）

747 限りなき神代の道も鳥の跡もれぬためしや空にあふかむ

淮南子。出于春部。

〔出典〕碧玉集、一二九五番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕(書に寄せる祝い)

果てしない神代の道も、文字で書き漏らされることはない例であるなあ。天を仰ぎみよう。

淮南子。春の部に出る。(71番歌、参照)

〔考察〕当歌の第三句「鳥の跡」は、蒼頤が鳥の足跡を見て初めて文字を作った、という故事により文字を意味する。初句から第四句までは、始まりも終わりもなく無限である神代でさえ、神話としてすべて記録されると解釈したが、結句との繋がりがよく分からない。第四句の「や」を詠嘆の間投助詞とみて、何もかもお見通しの天を仰ぎみると訳した。一方、「や」を疑問の係助詞として、天上の世界も文字があるから後世に伝えられることを、天はどのように見ているのか尋ねてみようか、とも解釈できる。(溝口利奈)

### 寄国祝

748 <sup>碧</sup>をさまれる国の名におふ玉垣のうちにもひろき恵をそしる

神武天皇紀曰、復大己貴大神目之曰、「玉牆<sup>ウサツクニ</sup>内国」云云。

〔出典〕碧玉集、一二八九番。日本書紀、卷三、神武天皇、二三七頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『日本書紀』「已―已」。

〔訳〕 国に寄せる祝い

平穩である国の名を持つ玉垣の内（の大和国）にも、広い恵みがあるのを知ることだなあ。

神武天皇紀によると、また大己貴大神おぢのみのおおかみはこの国を名付けて、「玉牆の内つ国たまがき」と言われた云々。

〔考察〕神武天皇は大和に「秋津洲あきつしま」という美称を付けたが、かつて神々も同じように美称を付けていたと説明した箇所。大己貴大神は偉大な、土地の貴き者を意味する神で、『日本書紀』では素戔嗚尊の子の六世の孫と伝える。「玉牆の内つ国」とは、玉のように美しい垣（青垣山）に囲まれた内つ国（大和国）をいう。かつて神々が贊辞したこの国の美称を踏まえて、国家安泰の恵みを寿ぐ。

〔参考〕『碧玉集』には、「寄国祝 小倉の大納言季種すすめ侍る」とある。小倉の大納言季種とは小倉季種（生没一四五六〜一五二九年）で、大納言に任ぜられたのは永正三〜一八年（一五〇六〜二二）。（溝口利奈）

#### 寄道祝言

749今そみん大津の宮のさため置し天津ひつきの道のためしも

文龜三年歌合此歌、大津の宮のさため置し天津日嗣と侍る、むかし、天智天皇、近江の大津宮にうつり住せた

まひ、これにて御即位などおこなはれしとそ承り侍る。「即位」と書て「あまつ日つき」とよみけるとかや。

抑、御即位のおこりを申さは、神武天皇、橿原宮に御位につかせ給をこそ濫觴とも申すへきに、「大津宮にさため置し」と侍るは、かの御時にまさしき儀式など定めおこなはれたる事の侍るやらん。日本紀をさへくはしくうか、ひ侍らねと、今の宣命の詞にも、「近江の大津の宮に、はしめたまひさためたまふのりのま、に」と侍れば、ことはりたかひては侍らし云云。

〔出典〕雪玉集、二五六二番。文龜三年三十六番歌合、二七番。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『文龜三年三十六番歌合』「天津日嗣—天日嗣」「おこりを申さは—おこりを申は」「日本紀をさへ—日本紀などをさへ」。

〔訳〕 道に寄せる祝言

今こそ見よう。大津宮で（天智天皇が）決めておいた皇位継承の道理の先例も。

文龜三年歌合で、この歌の判詞によると、「大津の宮の定め置きし天つ日嗣ひつぎ」とありますのは、昔、（西暦六六七年に）天智天皇が近江の大津宮に移り住まわれ、（その翌年）ここで御即位などを行われたと承っております。「即位」と書いて「あまつひつき」と訓じたとか。そもそも御即位の起源を申すと、神武天皇が橿原宮かしはらのみやで御位にお即つきになられたのを始まりと申すべきだが、「大津の宮に定め置きし」とありますのは、天智天皇の御代に正式な儀式などを決めて行われたことがあるのでしょうか。『日本書紀』までも詳しく調べておりませんが、現行の宣命の言葉にも、「近江の大津宮において始められ、お決めになられた法に従つて」とありますので、道理に反してはいないでしょう云々。

〔考察〕宣命の一節「近江の大津の宮に始めたまひ定めたまふ法のり」は、天智天皇が制定したと推定される法。慶雲四年（七〇七）元明天皇の即位の宣命に、「近江大津宮御宇大倭根子天皇乃、与天地共長与日月共遠不改常典止立賜比敷賜あまのたまひ留法乎」（続日本紀、巻四、元明天皇慶雲四年七月）とあるのが初見。従来、主に『近江令』などを指すと考えられてきたが、現在では皇位継承法説が有力。当歌は応仁・文明の乱による室町幕府の政治的、経済的困窮のため後柏原天皇が即位式を挙げることでできずにいた背景を踏まえ、待望する気持ちを込めて詠む。後柏原天皇の即位式は、踐祚後二二年目の大永元年（一五二一）に行われた。

〔参考〕『雪玉集』の歌肩に記された「文龜三六十四歌合」は、文龜三年（一五〇三）六月一四日の歌合を示す。同年三月三日に開始された着到和歌の満日が六月一四日であった。

寄鶴祝

750 柏玉花になき水に住てふもろ声に契りかをきし和歌の浦鶴

古今集云、花に鳴うくひす、水に住かはつの声を聞は、いきとしいけるもの、いつれか歌をよまさりける。

〔出典〕柏玉集、一八九五番。古今和歌集、仮名序、一七頁。〔異同〕『新編国歌大観』『八代集抄』ナシ。

〔訳〕 鶴に寄せる祝い

（鶯が）花間に鳴き、（河鹿が）水に棲んで鳴くという声に合わせて約束を交わしたのだろうか、和歌の浦の鶴は。

古今和歌集によると、花間に鳴く鶯、清流に棲む河鹿の声を聞くと、生きているすべてのもので、どれが歌を詠まないだろうか（いや、すべてのものが歌を詠む）。

〔考察〕 出典は和歌の本質と効用を説いた冒頭の一部。「和歌の浦」は「若の浦」ともいい、和歌山市南部の和歌浦湾北部の景勝地。奠てんぐやま供山の麓に玉津島神社があり、和歌三神の一である衣通えとわりのみ姫も祀られている（712番歌、参照）。山部赤人の「若の浦に潮満ち来れば渴をなみ葦辺をさして鶴鳴き渡る」（万葉集、卷六、九一九番）の影響で、「鶴」とともに詠まれる。鶴は長命な鳥とされたので、和歌の浦の鶴は永続する歌道の象徴。河鹿は溪流にすむアオガエル科の蛙。鳴き声が秋の鹿の声に似ていることからこの名があり、古来、雄の美しい鳴き声が愛でられた。

（丹羽雄一）

跋文

凡例

一、翻刻は原文のままを原則として、誤字・脱字・濁点・当て字・仮名遣い等も底本の通りにしたが、読解や印刷の便宜を考慮して句読点を付け、底本の旧漢字・異体字・略体は通常の字体に改めた。

一、「訳」の欄には、翻刻した古文の現代語訳を置く。なお理解を助けるため、主語などの補足または語釈などを設け、それらは( )内に入れる。

一、「注釈」の欄には、翻刻した古文の注釈を設ける。注釈した箇所は、古文に通し番号(1以下)を付す。注釈本文に挙げた和歌には、『新編国歌大観』の歌番号(ただし万葉集は旧番号のみ)を示す。また例文が『新編日本古典文学全集』(小学館)に収められている場合は、そのページ数を記載する。

一、末尾に、担当者の氏名を示す。

三のあまりのいとまにまかせて、古き家の集ともをとり出つ、おろくうか、ひ見たりし中に、三玉集の歌のこゝろもえさるか、いとおほかりしを柳の糸のよりく楮の国のはしくに書つらねて、はらにあちはひ口にすゝるに、から大和のふる事ともあたらしくなれる心言葉とりくに、けに藍より青きためし成へし。やつかり本より難波津のなかれを汲、浅香山の陰をうか、ふともあらず。枝の雪をならし窓の螢をひろはされは、文の道にたとくしき事、さなからほときを蒙りて壁にむかふに似たる物から、ひたすらすきの心の引にまかせて、さもと思ふふること

とを入ぬる磯の草にたくへる文ともにかうかへあはせ、いさ、か其おもむきをしるしつけて、ひとつく歌の心をあかさむとす。三玉の外も更にまた続撰吟、一人三臣抄、一字御抄などの中、おなし作者の歌に一ふしのよしゆかりある歌は、かつく是をもましへ入侍し程に、かれこれ抄出の和歌すへて七百四十余首、四のとき恋雑の部をわかち、上下ふたつの巻となす。其おほけなきしわさ、管をもてあまつ空をうか、ひ、蠶をもて大海をはからんとするかことし。

〔訳〕

冬の雨夜の暇にまかせて、古い家集などを取り出し、ところどころ調べて見ていた中に、『三玉集』の和歌で理解できないのが、とても多かったのを時折、田舎で紙の端に書きつらねて、腹で味わい口にすする（ように心中で吟味して口ずさむ）うちに、中国や日本の古い詩歌が（和歌に詠まれて）新しくなった心や言葉はいろいろで、なるほど「青（和歌）は藍（古典）より出でて藍より青し」の例のようである。私めはもとより、歌の伝統に通じているわけでもない。苦学していないので、学問に心もとないことは、まるで甕をかぶって壁に向かう（ように前途が全く分らない）のに似ているけれども、ひたすら風流心に引かれるのにまかせて、これはと思う古事を、（潮に隠れている磯の草のように）なかなか見つけられないが、出典を考え合わせ、少しばかりその内容を書き付けて、一つ一つ和歌の本質を明らかにしようとしたのである。『三玉集』の他にも、さらにまた、『続撰吟集』『一人三臣抄』『一字御抄』などの中から同じ作者の歌で、一節でも由来や関係のある歌は、とりあえず混ぜ入れましたところ、あれこれ書き抜いた歌は全部で七四〇首余り、四季と恋、雑の部に分け、上・下二巻とする。その身の程知らずの所業は、管の穴から広大な空を覗き、貝殻で大海を測ろうとするようなものである。

〔注釈〕

1 「三の余り」こと「三余」とは、読書に最も適した三つの時期、すなわち冬(年の余)・夜(日の余)・陰雨(時の余)の三つの時を指す。たとえば弘和元年(一三八一)に長慶天皇が編集した『仙源抄』の跋文も、「弘和の初めの年、三の余りの折々」から始まる。 2 「家の集」は、個人の歌集のこと。私家集。 3 『古今和歌集』仮名序に、「この人々をおきて又すぐれたる人も、くれ竹の世々に聞こえ、片糸のよりよりに絶えずありける。」とある。「片糸の」は、糸を寄りあわせるところから「より」などに掛かる枕詞。「よりより」は時々、折々の意。「柳の糸」は細くてしなやかな柳の枝を糸に見立てていう語。文明八年(一四七六)に成立した宗祇の連歌撰集『竹林抄』にも、「蘆原の世々につたはりて、柳の糸のよりよりにたえずありける。」とある。 4 楮は紙の原料で、紙そのものを指すこともある。「楮の国の端々」に、「楮の端」(紙の端という意)と「国の端々」(田舎、場末という意)を重ねる。 5 「腹に味はふ」は心中でじつくりと玩味する、という意。〔参考〕「この歌はあるが中におもしろければ、心とどめてよまず、腹にあちはひて」(伊勢物語、四四段) 6 「青は藍より出でて藍より青し」とは、教えを受けた人が教えた人より優れること。出典は「学不可以已、取之於藍而青於藍、冰水為之而寒於水。」(荀子、勸学篇。24・282・303番歌、参照)。青色の染料は藍から取るが、原料の藍よりも青いことになぞらえ、「唐大和の古事」(中国・日本の古典)を踏まえた和歌が、出典より優れていることをいう。 7 「やつがり」は「僕やつがれ」と同意で自称。上代・中古では自分の謙称、近世では男性のやや気取った文語的な用法。 8 『新古今和歌集』仮名序の、「難波津の流れを汲みて、澄み濁れるを定め、浅香山の跡を尋ねて、深き浅きを分てり。」(和歌の伝統に照らして、歌の優劣や深浅を判断した、という意)を踏まえる。「難波津」は「難波津に咲くやこの花冬こもり今を春べと咲くやこの花」(古今和歌集、仮名

序。王仁の作と伝える)、「浅香山」は「安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を吾が思はなくに」(万葉集、卷一六、三八〇七番)を指す。この二首は『古今和歌集』仮名序に、「難波津の歌は帝の御初めなり。(中略)安積山の言葉は采女のたはぶれよりよみて、(中略)この二歌は歌の父母のやうにてぞ手習ふ人のはじめにもしける。」とあり、伝統的な和歌の代名詞とされた。9 「蛍雪の功」(学問に努力する。苦学する)。「枝の雪」は『孫子世録』、『晋書』孫康伝等の、家が貧しくて灯火用の油が買えず、雪明かりで勉強したという孫康の故事。「窓の蛍」は『晋書』車胤伝等の、蛍を集めてその光で書を読み学問に励んだという車胤の故事による。「参考」「世界の栄華にのみ戯れたまふべき御身をもちて、窓の蛍を睦び、枝の雪を馴らしたまふ」(源氏物語、少女の巻、二六頁)。16・273番歌、参照。10 「ほとぎき」(古くは「ほとぎき」は湯水などを入れる素焼きの土器や甕。「ほとぎきを蒙りて壁に向かふが如し」とは、前途の全くわからないこと。また、すぐ前にある危険に気づかず、自分からそれに近づくことのたとえ。「参考」「一日乍<sup>レ</sup>抑<sup>レ</sup>別涙」、罷<sup>レ</sup>出御所<sup>レ</sup>之後、不審端多雖<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>余。実如<sup>レ</sup>蒙<sup>レ</sup>瓮<sup>レ</sup>向<sup>レ</sup>壁」(保元物語、下、左府の君達並びに謀叛人各遠流の事)。「Fotogiuino comutte cabeni nucoga gotoxi」(ホトギヲ カウムツテ カベニ ムカウガ ゴトシ)頭に壺をかぶって壁を向いている人のように」(日葡辞書) 11 「潮満てば入りぬる磯の草なれや見らく少なく恋ふらくの多き」(万葉集、卷七、一三九四番、作者未詳)を踏まえる。この和歌は満ち潮に隠れてしまう磯の草のように、なかなか逢えない嘆きを表わす。ここでは、出典となる「文」を探すのに苦労した、の意か。「参考」「慰めに、東宮の御前<sup>(まへ)</sup>は参りたまへれば、「入りぬる磯なるが心憂きこと」と恨みさせたまへば、」(狭衣物語、卷一、七二頁)。12 『続撰吟抄』は天文初年(一五三二)頃に成立した私撰集。編者は徳大寺実通か。最多は飛鳥井雅世の八六二首、次いで三条西実隆の五六五首が入集。『雪玉集』の編纂資料として用いられた。13 『一人三臣和歌集』は後柏原天皇と臣

下の三条西実隆・冷泉政為・冷泉為広の和歌を収集して編纂したもの。14 後水尾天皇編『二字御抄』、全八卷。一

字の歌題を三八四題設け、それぞれの題詠歌を置く。元禄三年(一六九〇)出版。15 管の細い穴から広大な空をの

ぞこうとするように、自分の狭い知識を基準にして、広大なことについて勝手な推測を下すことをいうたとえ。16

「蠡れいをもて大海を測る」とは、貝殻(一説に、ひさご)などの小さな入れもので海の大きさを測るように、わずかな

知識で遠大な物事を推測することのたとえ。「参考」「是れ猶し螺かを以て海を酌み、管くだに因りて天を闚るがごとし。」

(日本霊異記、下、序、二四三頁)。「たとへば嬰兒の蠡を以て巨海を測り、蟪蛄が斧を取つて隆車に向ふ如くなり」

(能「木曾」)。(八木智生)

しかあれば、註釈を作りあらはして、それか書1の忠臣とかやいはれしためしは、本よりねかへる心にあらず。た、  
みつから朝夕の枕2こととして、ふるき3をたつねあたらしきをしるのなかたちとせんかために、おもてをかきにするは  
ちをわすれて、いさ、かの心さしをとけ4畢りぬ。抑、拙き身5の菽麥をさへわかたぬ心に、うるはしくしらぬ事をも  
ほ、ゆかめてしるせることのおほからんは、其恐れすくなきに非ず。ひろく見、おほくきける人にあひて、あやまり  
をた、されん事は、古柄7小野の本柏もとより望む所なから、うとき人にはさすかに、もらしみすへきにもあらで、し  
はらくふはこの底にかくしぬ。ときに、正徳きとのひつし季の春、萍8はしめておふる日にあたりて、ことのよしを  
しるしつくること、しかなり。

〔訳〕

一枝軒主人 尚房

そうであるから、注釈を作り著わして、それが書の忠臣とか言われた例は、初めから願っているわけではない。ただ自ら毎日、口癖にする言葉として、温故知新の仲介をするために、面を垣にする恥（物事が見えず融通の利かない）を忘れて、わずかばかりの（著作の）意向を遂げ終わった。そもそも思慮分別のない身で、大豆と麦さえ区別できない愚かな心で、正しく知っていないことも、誤りをまじえて記したことが多いだろうし、その心配は少なくとも。広く見て多く聞いた（博識な）人に会って、誤りを正されることは、老境に達したわが身のもとより望むところではあるが、親しくない人には、そうはいってもやはり、漏らして見せるべきでもなく、しばらく文箱の底に隠した。時に、正徳五年（一七一五）三月、浮き草が初めて生える日にあたって、事情を書きつけることは、この通りである。

一枝軒主人 尚房

### 〔注釈〕

1 唐代に顔師古は『漢書』の注を付して「漢書の忠臣」と崇められた。それを踏まえた表現。 2 『源氏物語』に「その筋をぞ枕言にせさせたまふ」（桐壺の巻、三三三頁）とあり、『源氏物語湖月抄』では「枕言」を、「明けくれのことわざをいふ云々と奥人にあり」と注す。「奥人」は藤原定家編『源氏物語奥人』を指す。 3 「子曰、温故知新、可以為師矣（子曰はく、故きを温ねて新しきを知れば、以て師為るべし）」（論語、為政第二）による。先人の学説などを繰り返し研究しながら、現実在即した新しい発見ができるようになれば、人の師となる資格があるという意で、学問に対する姿勢を表わす。 4 「面を垣にする恥」とは、「人而不為周南・召南、其猶正牆面而立也与（人にして周南・召南を為ばずんば、其れ猶ほ正しく牆に面して立つがごときか）」（論語、陽貨第十七）による。人として（詩

経の最初の二編である)周南・召南を学ばないと、土墾の真ん中に面と向かって立っているようなもので、前進も出  
来ず、また土墾の内側も見られず、まったく融通の利かない人間になってしまふという意。「参考」「面を垣にしてた  
てらんがごとし」(千載和歌集、序)。 5 「不能弁菽麥(菽麥を弁ずること能はず)」(春秋左氏伝、成公十八年)に  
よる。「菽」は大豆、「麥」は麦で、それらの区別もできないほど愚かだという意。 6 「頬ゆがむ」は事実と違ふ、  
間違えるの意。『源氏物語』に「すこし頬ゆがめて語るも聞こゆ」(帚木、九五頁)、「ほほゆがむこともあめればこ  
そ」(朝顔、四七七頁)、「うちほほゆがみ」(若菜上、五三頁)と用例がある。 7 「古柄小野の本柏」は「もと」を  
導く序詞。例「いそのかみふるから小野のもと柏もとの心は忘れなくに」(古今和歌集、雑上、八八六番、よみ人  
知らず)。柏は落葉樹であるが、枯葉は枝についたまま越冬し、その葉を本柏という。老境に達した作者を暗示する  
か。『三玉挑事抄』が刊行された享保八年(一七二三)時点、編者の野村直房は数え八四歳。 8 「萍」は浮き草、  
根なし草。

(湯本美紀)